

# 部落の乳幼児の実態と保育の課題

大阪チャイルドネットの調査から

玉置哲淳

## 要約

本論文は、子育てにおける生活習慣と遊びを軸にした子どもの成長に視点をおいて大阪同和保育連絡協議会が行った1985年・1995年調査を引き継ぎ、チャイルドネット大阪の同和保育プロジェクトが中心となって行われた同和保育に関わる調査の報告である。顕著な傾向として、85年・95年調査で示された課題を克服している層とそうでない層への分化、子育てにおける部落問題の課題、保育運動への参加意識の弱まりが見出された。この意味においては、子育てにおける部落問題の現状を正しく保育運動の課題とする必要性が示された。

## 1 はじめに—調査の目的・方法

### ①はじめに

本稿は、大阪チャイルドネットにおいて同和保育プロジェクトが組織され、その検討を踏まえて行われた実態調査に基づいて、部落の子どもと親の実態理解を報告するものである。この調査は、「地対財特法」が失効した後、保育に関わっては初めて行われる「同和」保育調査である。チャイルドネットでは同和保育を念頭において同和保育プロジェクトの研究チームが組織され、そのチームで調査は行われた。同和対策審議会・地対法の完了のなかで何が同和保育において何が実現し、何が課題なのか、これまでの総括がなされていないだけに、多くの人々の協力の下で行われた。その結果は、大きくいえば、ある程度達成できたといえる側面もある半面、相当課題があることも示された。このことは、関係者（特に親・行政）においてぜひ検討していただきたいと考えている。

なお本稿は、『子ども・家庭・園をつなぐ——同和保育研究プロジェクト子育てアンケートより——』（大阪保育子育て人権情報研究セン

ター、2008。文献1と以下略記）に基づいて加筆修正したものである。本稿の字数制限のためにデータを割愛せざるを得ないところがあったので、文献1も参照していただきたいことをあらかじめお断りしておきたい。

### ②調査の目的・方法と結論

#### 1) 法期限切れ後の初の調査の意義と視点

今回の調査は、「地対財特法」が失効した後、保育に関わっては初めて行われる同和保育調査となった。つまり、これまで多くの取り組みと施策が行われてきたが、それは被差別部落の子どもや親たちにどのような成果を生み出し、また、どのような課題を残しているのかの冷静な判断が必要であると思われるが、経験知を超えた整理は行われなかった。しかし、法的にどのように考えるかはいろいろな議論があるとしても、子どもの実態の理解なくしてはこれからの同和保育は考えられない。大阪府・市を含めた多くの自治体の努力もあるなかで、同和保育の精神を受け継ぎ、引き続きその保育の実現を目指す思いは関係者の共有するところと考えている。そこで、その施策や保育実践が望ましい結果を示しているのかを検証し、今後の課題を探

る目的で行われた。

調査の目的として提起したことは、第一に、子育て・子育てに現れている部落差別を明らかにすることである。第二に保護者の願い・悩みや保護者会・園の活動に関わる実態把握を通して、部落の子育てを検討し、保育課題を整理することである。すなわち、部落の子どもの実態・子育ての実態を踏まえて、同和保育の課題を検証しようとした。

## 2) 調査の内容と方法

—85年調査・95年調査との比較を念頭に

上記の第一の目的のために、「子育てと子どもの生活に関するアンケート調査」(第1調査)、「園における子どもの姿」(第2調査)を行い、また、第二の目的のために「親へのインタビュー」(第3調査)を行った。

この内容を考えるにあたり、1985年調査1995年調査(44頁の引用・参考文献を参照)を念頭において、可能な場合には比較検討することで、同和保育の現在を客観的に評価することを心がけた。ただし、対象の選び方、方法に一定の制約があり、結果の読み取りの際に課題が残っている部分もある。今回の調査は、チャイルドネット大阪の同和保育研究プロジェクトの中で行われたため、85年調査、95年調査から言うと規模や内容の点で限界を持っている。

今回、部落の現実を整理するために、保育所Aが部落を代表するものとし、比較群としては保育所Cおよび幼稚園とした。保育所Bはいわゆる「同和」保育所であるが、地区外が圧倒的に多い保育所である。しかし、幼稚園は子育ての部分だけで調査が行われたので、全面的に比較することができず、子どもの育ちの部分では保育所Cだけを比較群としている。何をもって部落を代表するものとするかは難しく、今回は保育所Aを操作的にそうみなしている。よって、以下述べることはそうした操作的な定義に

基づいているものであり、限定的なものであることを前提としている。しかし、それでも今回の調査からいくつかの特徴的な事柄が浮かび上がってきたことも事実である。

## 3) 本調査からの結論

結論として大きく言えば、同和地区の子どもたち、および親の課題として単純集計からいえることは、次の四点である。

- ① 子どもの育ち(主に第2調査)という点では、遊びを軸に順調に育っており、同和保育の成果が一定認められる。
- ② 子どもの生活(主に第1調査)の点では、順調に育っている層がいる反面、そうでない層もまたおり、二極化が進行している。
- ③ 親たちが自主的に活動してお互いを高めあうなどの活動への参加が弱くなり、個人に任される傾向が見られる。
- ④ 部落への差別意識を相当意識している傾向が部落の親たちに見られ、保育からの啓発の課題につながる事柄が見出された。

以上のことから、部落の子育てについては、ある経過的な評価をするべきであろうと考える。すなわち、これまでの同和保育の取り組みが良かったか、そうでなかったかかという二分法で評価するのではなく、上記①のように同和保育の取り組みが一定の成果もある一方、②のように生活面を中心にして課題が依然として改善されない傾向もあるという現在のありのままを率直に認めることから、今後の課題が浮かび上がると考えられる。

結論を先取りして言えば、同和保育の取り組みにもかかわらず、課題を明白に残している、かつての状況のままの層が明らかに存在するという事実があるが、この点をどのように考察するかは後述する。

まずは、上記の結論に至った細部のデータを  
確認したい。

## 2 親の実態・子育ての実態(一次集計より) —一部を除いて子どもの生活は依然厳しい

### ① 子育ての実態について —生活項目から

#### 1) 遅くなる就寝時間と起床時間 —大都市平均の2倍の遅寝傾向

早寝早起きの生活リズムは、1980年代以降早  
くから同和保育が取り組んできた課題であっ  
た。しかし、図1および図2のように今回の調  
査では95年調査と比べ、遅く寝て、遅く起きる  
傾向が特に保育所Aで強く見られた。(22時以  
降の就寝：保育所A 56.8%、B 36.5%、C 38.5%、  
幼17.0%；95年地区内31.2%、95年地区外26.4

%)。今回の調査対象が3歳児以上であることを  
考えると、3歳未満児では夜型傾向が一層進  
行しているのではないかと推測できる。また、  
起床時間の変化を見ると、保育所A・Bともに  
10年前より就寝時間が遅くなっている分、起床  
時間も遅くなっている。とりわけ保育所Aは大  
幅に遅い生活へと変化している。

一方、保育所Cは就寝時間が遅くなっている  
にもかかわらず、起床時間は早くなっている(8  
時までの起床：保育所C 89.8%；95年地区外  
88.2%。なお、比較のデータは文献1、23～24  
頁参照)。

ちなみに、各種調査では一般的に夜型に移行  
しているが、そのことを考慮しても、保育所Aの  
夜型傾向はあまりにも著しい結果になったとい  
える。

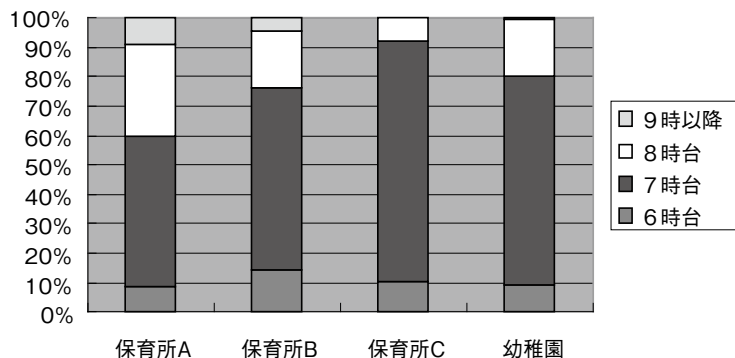


図1 起床時間の分布

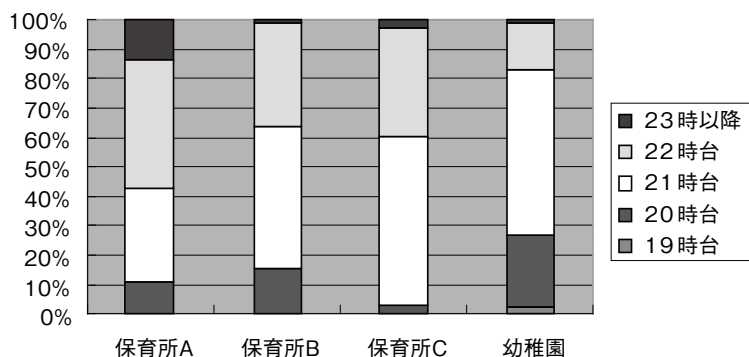


図2 就寝時間の分布

## 2) 地域・保育所ごとに異なる朝食

朝食の結果は図3で示されている。朝食は、8割以上の子どもが食べているが、保育所Aでは、週に「1日～3日」「食べていない」をあわせると9.2%になり、約1割の家庭が1週間のうち朝食を乳幼児がほとんど食べていない結果となっている。保育所Aを個別に見ると、1園で5.3%の子どもがまったく食べていないという気になる数値であった。他の園においても6%～11%の範囲で、「1日～3日」の摂取となっている。

この意味では、朝食を食べていない事例を例外的と見るのかどうかは微妙であるが、生活面での保護者への働きかけがなされてきた同和地区保育所において、こうした傾向があることに重大な課題が見えてきたといえる。

## 3) 進行する「テレビが子守る」実態

設問の仕方が異なるため、95年調査と正確な比較にならないが、「ほとんど見ない」「1時間以内」のテレビ等視聴が、95年調査は、地区内22.5%、地区外23.1%であったが、今回は、保育所A10.6%、B16.2%、C21.4%、幼稚園23.6%と、傾向としては保育所A・Bでは減少している(図4)。

一方「3時間以上」は、95年の地区内17.6%、地区外6.6%から、今回は保育所A58.4%、B39.2%、C33.3%、幼稚園35.6%と、全体に大幅に増加を示した。テレビだけでなくビデオを見る家庭が増えてきていることも原因ではないかと考えられるが、4時間以上見ている家庭では、保育所から帰って来てからずっとテレビかビデオがかかっていることが想像できる。

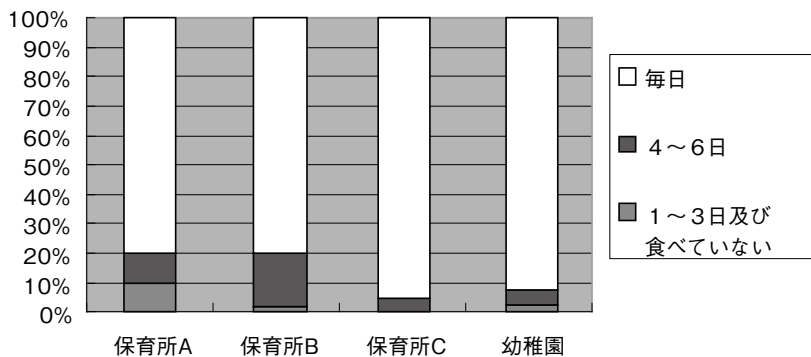


図3 1週間の朝食摂取回数

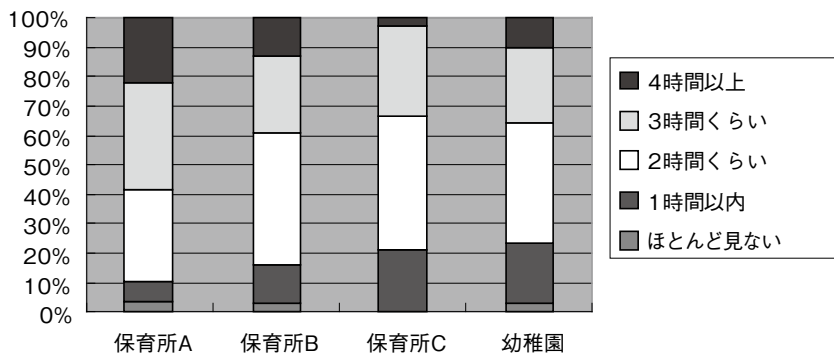


図4 テレビ・ビデオ等の平日の視聴時間

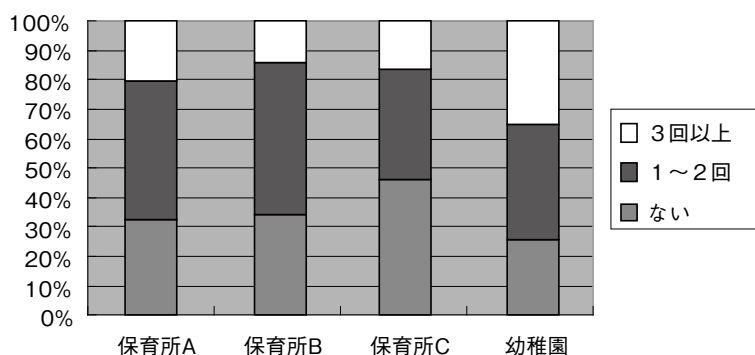


図5 ゆったりした気持ちで絵本を読んだ回数

以上のように、全体的にテレビが子守するという実態がむしろ進行していると言える。子どもの数・保護者と子どもの関わり方などいろいろな要因があると考えられるが、保育所が行ってきた取り組みが必ずしも成果を上げていない実態もあると考えられる。

#### 4) 子どもに向き合って絵本の読み聞かせをする家庭とそうでない家庭が分かれつつある

図5から、保育所A・Bおよび幼稚園では、週に1度でもゆったりとした気持ちで絵本を読んであげている保護者が7割方いると言える。他方、保育所Cの保護者が忙しい生活に追われ、ゆっくりした気持ちで読む余裕がないことがうかがえる。この点は、園の努力・保護者の努力による同和保育の成果が現れているとも言える。

ただ、今回の回答からは分からないが、子どもの年齢が高くなると「自分で読んでいい」というふうに考えている保護者もいるという保育者からの声があり、「なし」と回答した中にはそれも含まれているかもしれない。

#### 5) 子どもの生活・家庭についてさらなる理解が必要

以上の生活の各項目を見ると、絵本の読み聞かせでは成果があると言える半面、生活のリズ

ムに関する他の項目、テレビ・ビデオ等の視聴では課題が見えてきた。つまり、同和保育の成果が現れているのではないとも言える面と、依然として厳しい実態に子どもが直面している面とがあると言える。特に、生活習慣に関わる部分は、現実の生活・労働に左右されるとともに、生活の中で培った習慣が簡単には変わることがない部分がある。この点については、保育所Aでは特に留意して施策や保育実践が焦点化される必要があると思われる。ともあれ、この点の詳細な理解と実践体制の確立が急務だと考えられる。

こうした生活リズムの確立は短時間で達成できるものではなく、2世代・3世代の息の長い、多様な取り組みを必要としていることを改めて銘記しておく必要があるし、そのために何が必要なかをさらに検討する必要があると思われる。

#### 6) 厳しい家庭との丁寧な連携・共同の必要性

同時に、家庭での生活に対して子どもを軸にした取り組みで、成果の見られる層とそうでない層とにパターンが分かれていることを示していると捉えると、タイプごとに丁寧な対応が必要なことがうかがえる。いずれにしても、必要な連携と子育ての共同性をどのように確立するのが保育所での重要な課題だといえるので、

更なる工夫が必要と思われる。

## ② 保育所への高い期待と多い単親家庭

今回の調査では、親の経済的基盤など親の生活全般の調査を行えなかったが、親の属性から分かることは、次の二点であった。

### 1) 保育所への高い期待

第一に、保育所への入所に関しての親の考え方である。保育所A・Bにおいては、就労していない層が相当数保育所に預けていることが明らかになった。特に、保育所Aはその傾向が強く、同和保育の中で子どもの現実から出発し、皆保育の方向を先取りしてきた伝統が現在も生かされていることを示している。また、入所時期について、乳児から保育所に預ける傾向が保育所A・Bで顕著にあり、保育所への期待が大きいと言える。

### 2) 高い割合の単親家庭

第二に、部落の親の家族構成で特徴的であったことは、単親家庭の比率の高さである。具体的には、単親家庭が保育所A(28.4%)、B(25.0%)には多く、保育所C(12.8%)と比べてもダブルスコアであり、幼稚園(1.6%)と比べれば15倍以上ときわめて顕著な傾向がうかがえる。

福祉施設としての性格上、保育所で単親家庭が多いのは当然としても、1998年の国勢調査によれば、あらゆる年代層を含めての数値であるが、全国平均は1.98%となっている。

今回の調査では推測しがたいが、部落の家庭基盤の問題、部落問題が関与している可能性も高いと言えるので、本格的な調査や実践的に保育所が把握していく必要があると思われる。同時に、福祉機能を明確にした保育所のあり方を追求していく必要がある。

また、子育ての意識と行動を調べた結果についても述べておく。叱らない・ほめるなどはグループ間に差がなかったこと、しかし、少なく

なる傾向にある家族内交流、薄くなる傾向にある地域の人間関係が見られたが、紙数の関係で詳しくは報告書で確認されたい。また、保育園・幼稚園への期待などを聞いたが、これも紙数の関係で省くので報告書(文献1)を見ていただきたい。特に検討する必要があるのは、不参加の傾向にある保護者会・学習会である。特に保育所Aでは、「必ず参加する」のパーセンテージが二桁を割っている(95年調査では、34.0%が必ず参加していると回答していた)。状況は深刻であるとも言える。また、保育所間の差は大きい結果となっている。

## 3

### 子どもは育っているか

—「園における子どもの姿」からの考察

#### ① 子どもの育ちには地域の差が出てきている

子どもの育ちの調査を示したのが表1である。これを見ると、年齢的な遊びの特徴はあるものの、保育所Aおよび保育所Cでは、子どもたちは順調に育ってきていると言える。とりわけ保育所Aでは、「人間関係」については順調な伸びを示しており、特に子どもたち自身で解決する力が育ってきていることがうかがえた。一方、保育所Bでは、3歳児ではそれほど差がない項目においても、5歳児になって停滞、あるいは明らかに下降線をたどっており、伸びが見られない。具体的には、「ルールのある遊び」は、年齢が上がるにつれて、確実に上昇する傾向にあるが、保育所Bでは大きく下回っていることに着目する必要がある。同じく「ごっこ遊び」が伸びていない点も気になる。

「構成遊び」は、子どもの遊び環境に大きく左右されるが、これについては各保育所で保育環境について見直してみる必要があると考えられる。

グループ間の格差についても、要因や背景を

探る必要があると考えられる。

また各地区の中においても格差が見られ、これからの保育のあり方が問われていると思われる。

以上の分析を概括すれば、今回の限られた「遊び・生活」の調査項目の一次集計からは、全体として保育所Bに課題があり、保育所Aは順調に育っている傾向が見られた。その要因については、はっきりとしたことは言えないが、保育所Bにおいては地区外入所が多くなり、同和保育としての保育の位置づけが保育所・保護者会で弱くなっている可能性もあり、慎重な検討が必要である。これに対して、保育所Aは、目的意識をもって保育しているとも考えられるが、そのデータとなるものはないので今後実践的に検討して見る必要がある。

## ② 園における子どもの姿（遊び・生活・人間関係）の項目間の相関

### 1) 生活と子どもの姿の相関

園における子どもの姿と生活との相関を見るときに、グループ間の年齢を統一するために、5歳児に絞り検討した。その相関を示したのが表2である。

これを元に保育所タイプごとの特徴を述べる。

保育所Aは、〈ルールのある遊び〉とごっこ遊び・生活・人間関係、〈ごっこ遊び〉と生活・

表1 園における子どもの姿（85年調査との比較）

		3歳児	4歳児	5歳児	85年(%) 地区(地区外)
ルールのある遊び	かくれんぼをして、見つからないように一人でものかげに隠れる	A 90.5% B 68.8% C / 全 81.1%	A90.5% B / C 94.7% 全 91.8%	A 96.4% B 87.5% C 90.5% 全 91.8%	2歳 56.4(53.8) 3歳 73.8(55.6) 4歳 78.3(91.9)
	オニごっこをして、オニになると他の子を追いかけつかまえる	A 90.5% B 93.8% C / 全 91.9%	A 88.1% B / C 94.7% 全 90.2%	A 100.0% B 79.2% C 95.2% 全 91.8%	3歳 91.3(84.7) 4歳 92.8(95.9) 5歳 98.4(98.6)
	たかオニ、しっぽとり、オニごっこのルールが分かって遊ぶ	A 92.9% B 87.5% C / 全 90.5%	A 88.1% B / C 94.7% 全 90.2%	A 96.4% B 95.8% C90.5% 全 94.5%	4歳 89.9(94.6) 5歳 96.7(95.9) 6歳 96.8(98.1)
ごっこ遊び	ごっこの時に「誰になってるのかな」と聞くと、答えてそのつもりになって遊ぶ	A 97.6% B 84.4% C / 全 91.9%	A 92.9% B / C 89.5% 全 91.8%	A 100.0% B 95.8% C 81.0% 全 93.2%	2歳 74.9(66.4) 3歳 88.5(91.9) 4歳 87.1(94.6)
	ごっこの時に、役に応じたいろいろな行為をする	A 90.5% B 75.0% C / 全 83.8%	A 90.5% B / C 84.2% 全 88.5%	A 96.4% B 91.7% C95.2% 全 94.5%	3歳 69.6(78.2) 4歳 82.5(87.8) 5歳 82.1(89.2)
	ごっこの中で、現実生活のルールをかなり細かく取り入れたりと「そうじゃない」と抗議をしたりする	A 69.0% B 56.3% C / 全 63.5%	A 83.3% B / C 36.8% 全 68.9%	A 96.4% B 50.0% C 85.7% 全 78.1%	4歳 77.5(85.1) 5歳 82.5(90.5) 6歳 87.2(88.5)
構成遊び	積み木をできるだけ高く積んで倒れそうになるスリルを楽しむ	A 92.9% B 68.8% C / 全 82.4%	A 50.0% B / C 68.4% 全 55.7%	A 100.0% B 91.7% C 90.5% 全 94.5%	2歳 87.0(90.8) 3歳 82.9(91.9) 4歳 83.8(88.5)
	積み木で汽車や家など、少し複雑な物をイメージしながら作る	A 76.2% B 68.8% C / 全 73.0%	A 78.6% B / C 63.2% 全 73.8%	A 96.4% B 41.7% C 90.5% 全 76.7%	3歳 68.2(81.5) 4歳 78.8(79.7) 5歳 80.7(87.8)
	大型積み木で、本当にその中で遊べる家などを作る	A 45.2% B 0 C / 全 25.7%	A11.9% B / C 42.1% 全 21.3%	A 42.9% B 0 C 90.5% 全 42.5%	4歳 63.2(73.6) 5歳 74.2(79.7) 6歳 87.2(76.9)
生活上のルールの理解	友達と順番に物を使う(順ばんこの理解)	A 95.2% B 56.3% C / 全 78.4%	A 97.6% B / C 100.0% 全 98.4%	A 100.0% B 100.0% C 95.2% 全 98.6%	2歳 73.9(79.0) 3歳 85.1(79.8) 4歳 90.1(97.3)
	友達同士で分担をしながら飼育・菜園などをする	A 69.0% B 0 C / 全 39.2%	A 52.4% B / C 84.2% 全 62.3%	A 64.3% B 58.3% C 90.5% 全 70.0%	3歳 37.2(41.1) 4歳 62.1(75.7) 5歳 78.5(89.9)
	自分のしたい遊びに移るために、見通しをもって行動する(片付けなど)	A 73.8% B 53.1% C / 全 65.0%	A 88.1% B / C 73.7% 全 83.6%	A 96.4% B 100.0% C 95.2% 全 97.3%	4歳 65.9(75.0) 5歳 70.7(70.3) 6歳 80.0(87.5)
人間関係	友達とケンカすると保育者に訴えにくる	A97.6% B 84.4% C / 全 91.9%	A 90.5% B / C 89.5% 全 90.2%	A 100.0% B87.5% C90.5% 全 93.2%	2歳 93.1(92.4) 3歳 89.9(93.5) 4歳 91.7(95.9)
	友達とたがいが主張したり、妥協しながら遊ぶ	A 81.0% B 75.0% C / 全 78.4%	A 85.7% B 75.0% C 78.9% 全 83.6%	A 100.0% B91.7% C 95.2% 全 95.9%	3歳 78.3(77.4) 4歳 87.8(89.2) 5歳 90.9(89.2)
	取り合いやケンカが起こった時に、いろんな方法を考え自分たちで解決しようとする	A 54.8% B 28.1% C / 全 43.2%	A 76.2% B / C 36.8% 全 63.9%	A 89.3% B 75.0% C 85.7% 全 83.6%	5歳 71.5(71.6) 6歳 78.0(84.6)

注) 斜線は該当年齢児がないことを示す。

各数値は「よく見られる」「時々見られる」とを合計したパーセンテージ。



表2 「子どもの生活」と子どもの姿の相関係数

		朝 食	起床時間	就寝時間	テレビ	絵 本
ルールの ある遊び平均	全体	0.062	0.043	0.100	0.043	0.118
	保育所A	0.134	0.196	0.080	-0.292	-0.203
	保育所B	0.185	0.256	<b>0.453</b>	0.169	<b>0.304</b>
	保育所C	0.173	<b>0.316</b>	<b>0.398</b>	<b>0.337</b>	-0.129
ごっこ遊び平均	全体	-0.128	0.070	-0.217	-0.139	0.009
	保育所A	0.299	0.090	-0.030	-0.133	-0.074
	保育所B	0.196	-0.035	-0.270	-0.094	-0.179
	保育所C	-0.210	<b>0.439</b>	-0.078	-0.189	0.115
構成遊び平均	全体	0.082	0.141	0.060	0.017	-0.030
	保育所A	<b>0.305</b>	<b>0.311</b>	<b>0.477</b>	0.007	-0.289
	保育所B	<b>-0.305</b>	<b>0.398</b>	<b>0.363</b>	-0.017	0.216
	保育所C	0.146	<b>0.467</b>	<b>0.415</b>	0.295	<b>-0.461</b>
生活上の ルール平均	全体	0.158	0.189	0.077	0.108	0.187
	保育所A	0.224	<b>0.433</b>	<b>0.341</b>	<b>0.445</b>	-0.029
	保育所B	<b>0.402</b>	0.231	0.273	0.098	0.056
	保育所C	<b>-0.329</b>	0.273	-0.055	0.033	<b>0.386</b>
人間関係平均	全体	-0.018	0.055	-0.028	-0.028	0.081
	保育所A	0.147	0.176	0.248	<b>0.657</b>	0.161
	保育所B	-0.079	0.118	-0.139	-0.075	-0.065
	保育所C	0.037	0.291	0.285	0.217	0.182

注) 相関係数0.3以上のものをゴシックで示した

人間関係、〈構成遊び〉と生活・人間関係、〈生活〉と遊び・人間関係、〈人間関係〉と遊び・生活との相関係数が0.4~0.7ほどで高くなっている。子どもの遊びの中で〈構成遊び〉を充実させるように、意図的・意識的な環境構成と保育の展開が今後の課題と言える。

次に、保育所Bでは、〈ルールのある遊び〉と〈構成遊び〉との相関係数が0.58と高く、〈生活〉と〈人間関係〉との相関係数が0.49と次に高いが、他の項目間の相関は全般的に低い結果になっていることから、かくれんぼなどの遊びがあまりされていないことが予想される。〈ごっこ遊び〉〈構成遊び〉〈生活〉〈人間関係〉による育ちを再認識して保育を展開するように、遊びの内容の検討と見直しが必要であるといえる。

次に、保育所Cでは、〈ルールのある遊び〉と〈生活〉との相関、〈ごっこ遊び〉と〈構成遊び〉〈生活〉〈人間関係〉との相関、〈構成遊び〉

と〈ごっこ遊び〉〈生活〉〈人間関係〉との相関、〈生活〉との相関は遊び・人間関係すべてに高い相関を示している。このことから、子どもの育ちの過程で、互いの項目が影響しあいながら成長しており、構成遊びを十分に楽しみ、遊びの環境が整えられていることが推測できる。

## 2) 課題

以上のことから、保育現場の課題として、人権保育の視点から子どもたちの「遊びと生活の充実と質の向上」を目指し、子どもの成長を保障できるような保育を展開することが大事と言える。具体的には、保育所Aでは構成遊びを充実させていくことが必要とされるし、保育所Bでは、ルール、ごっこ、構成の各遊びを通しての生活上のルールや人間関係の育ちを充実させていくことが必要とされる。また、保育所Cでは、ルールのある遊びが課題と言える。

園における子どもの姿の五つの項目間の相関から考えると、保育所Aでは構成遊び以外にお



いては、これまでの同和保育における保育内容の改善策の成果が上がってきているのではないかと考えられる。一方、保育所Bにおいて、項目間の相関があまり見られないのは、地区外入所の子どもと地区内の子どもの二極化があるのかもしれないし、その他の要因があるのかもしれない。

## 4 生活項目総合得点によるタイプ分け

生活五項目（朝食・起床時間・就寝時間・テレビ等の視聴時間・絵本の読み聞かせ）と他の各項目との相関を見るために、生活5項目の回答に1点・2点・3点の評点を与えて、その他の項目との関係を見た。

### ①生活得点タイプ別の分析(5歳児対象)

まず、生活得点の分布を見るため、生活得点を基礎にしたタイプ分けを行った。

その得点分布を保育所グループごとに見たのが図6である。

図6を見ると、保育所B・Cでは合計得点13点が過半数近くに達している。これに対し、保育所Aでは10点と12点にそのピークがある。また、保育所AおよびBでは、二つのピークがあり、

生活項目総合得点の高い層と低い層に二極化している傾向がある。それゆえ、保育所Cでは、全体的に生活項目総合得点が高いのに対し、保育所AおよびBでは、その得点が高い層と低い層に二極化している傾向が認められた。

そこで、「子どもの生活」項目の総合得点を、平均得点より高いH(12~15点)と低いL(11点以下)の二つのグループに操作的に分類した。この二分されたグループを「生活得点タイプ」と表し、以下検討した。

### ②生活得点タイプの分布状況とその傾向

#### 1)生活得点タイプの分布

この結果について、保育所A・B・Cを生活得点で分類すると、表3のような分布となった。

表3に見るように、保育所の生活得点を分類すると、保育所Aは、他の保育所と違う分布になっていることがわかる。まず第一に、保育所B72.0%、C80.0%と平均得点が高いHタイプが

表3 5歳児の生活得点タイプ別分布表

( )内は人数

	H	L	合計
保育所A	42.9% (6)	57.1% (8)	100% (14)
保育所B	72.0% (18)	28.0% (7)	100% (25)
保育所C	80.0% (16)	20.0% (4)	100% (20)
全体	67.8% (40)	32.2% (19)	100% (59)

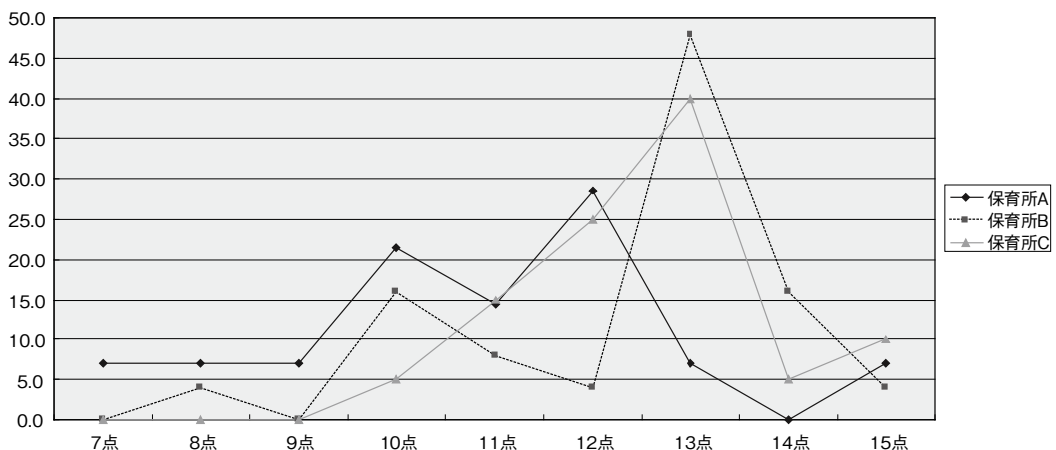


図6 生活項目総合得点の得点分布表

多いことがわかる。一方、保育所AはHタイプが42.9%となっており、Lタイプの方が多いたことがわかる（なお、統計的な検定を行った結果は、5%水準では有意な差は見られないが、10%水準では保育所Aは保育所B・Cとは異なる傾向であった）。

それゆえ、生活得点タイプから見ると、保育所Aではこれまでの同和保育の取り組みの成果が上がってきている層（Hタイプ）が42.9%いる一方で、成果があがっているとは言えないLタイプが57.1%いることが見えてきた。

そこで、他の項目との詳細な検討を行ったが、その結果は文献1の第5章を参照されたい。

## 2) 保護者の属性との関係

特に注意を払う必要があるのは、保育所B・Cでは仕事をしている層のH層は70%を超えているのに、保育所Aでは、40%を切る状態であること、つまり、仕事をしていないために子どもの生活が不安定になるのではないかということと仕事の安定を課題としてきたが、取り組みが子育てにその通り反映していないことが特徴的なことである。

また、保育所Aで仕事をしている層の就寝時間22時台をLタイプ(28.6%)とHタイプ(14.3%)と比べると、Lタイプの方が倍になっているが、保育所B・保育所CではHタイプの方が多いたことがわかった。

絵本との関わりでは、保育所A・B・Cともに、仕事をしている層の方が仕事をしていない層より絵本を読んでいることがわかった。つまり、どの保育所の親もがんばっているといえる。ただし、読んでいる回数は保育所A・BとCとでは有意な差が見られた。

## 3) 生活タイプと保護者活動

以上のように二極分解する保育所Aの中でHタイプをこれまで支えてきたのが、保護者自身

の活動であった。しかし、5歳児の家庭において、保護者会への参加は、「ときどき参加」「必ず参加」を合わせると、保育所CのHタイプの家庭では80.0%が参加しているのに対して、保育所AのHタイプの家庭では21.4%、保育所BのHタイプの家庭では44.0%となり、保育所AでのHタイプの家庭の参加率が最も低い状況である。これは、個人的に努力をしていることを示している可能性もあり、保護者の自主的な活動が重要となっていると思われる。

## 4) 生活タイプと単親家庭

5歳児の単親家庭の比率は、保育所Aが35.7%（5家庭）、Bは28.0%（7家庭）、Cは15.0%（3家庭）となっている。その単親家庭のうち、生活項目総合得点が低いLタイプの家庭は、保育所Aで7.1%（1家庭）、Bで8.0%（2家庭）、Cで5.0%（1家庭）となっている。一方、単親家庭ではなく両親が揃っているものの生活項目総合得点が低いLタイプの家庭は、保育所Aで50.0%（7家庭）、Bで20.0%（5家庭）、Cで15.0%（3家庭）となっている。

このことから、保育所Aにおいては、両親が揃っているものの生活項目総合得点が低いLタイプの家庭が半数の50.0%（7家庭）を占め、単親家庭ながらHタイプが28.6%（4家庭）となっている。

## ③園での子どもの姿との関係

### 1) 生活タイプと子どもの姿

次に、子どもの園での姿との相関を見た。ここでは、保育所Aにおいては順調に育っていると考えられる反面、保育所Bは、いろいろな課

表4 生活得点と遊びのマトリックス

生活得点 \ 子どもの姿	子どもの姿	
	Q(2.3点未満)	P(2.3点以上)
H (12点以上)	HQグループ	HPグループ
L (12点未満)	LQグループ	LPグループ

表5 生活得点と遊びの分布人数表

(人、%)

	LQ	LP	HQ	HP	合計
保育所A	2 (14.3%)	6 (42.9%)	1 (7.1%)	5 (35.7%)	14 (100%)
保育所B	7 (28.0%)	0 (0.0%)	15 (60.0%)	3 (12.0%)	25 (100%)
保育所C	1 (5.0%)	3 (15.0%)	3 (15.0%)	13 (65.0%)	20 (100%)
合計	10 (16.9%)	9 (15.3%)	19 (32.2%)	21 (35.6%)	59 (100%)

題をもっていることが明らかになった。

また、生活と遊びをクロスするために、四つのタイプを操作的（2.3未満および2.3以上）に想定した。すなわち、表4の四つに分けた。

## 2) 保育所タイプの特徴

そこで、園ごとにLQからHPグループの分布を見てみると、表5のようになった。

つまり、保育所Aでは、LPが有意に多いが、LQは保育所Bに多く、HQも保育所Bに多いという結果になった。また、遊びの点でも生活の点でも支援を必要とするタイプであるLQは保育所Aでは少なくなっており、同和保育の成果が一定確認されるものとなった。しかし、それもこれまでの保育条件・内容を前提にした数字であるので、クラスの定数加配がなくなった今では、同じ状況が生まれるのかどうか、今後注意深く見守っていく必要があると思われる。

## 5 人権意識について

### ① 同和問題を知ったのは大人になってからが意外と多い

今回の調査では親へのインタビューを行って人権意識について聞いた。対象人数が限られているため、以下に述べる傾向が妥当性をもつのかどうか明確ではない。しかし、それらの傾向はきちんとした検討が必要であることを示している。

全体では、同和問題など人権問題をはじめで知った年齢（文献1、59頁）は、「Ⅰ早期（12

歳まで）」が圧倒的に多く、「学校の授業で」「ビデオをみて」との回答が多くなっている。また、未記入が32.0%と多いことも気になるところである。

保育所Aは他の保育所・幼稚園と比較して、「Ⅰ早期（12歳まで）」が低く、「Ⅲ晩期（19歳以上）」が高くなっており、差別といつ、どこで、どんな出会い方をしたかに大きく関わっているのではと思われる。

### ② 「差別はなくならないととらえる」が結構多い

はじめて知った時、どう感じたかについて（図7）、保育所Aは、他の保育所・幼稚園と比べ、「1 差別を否定的、社会悪として受けとめた」が少なく、「3 差別を教えない方が良いと感じた、差別はなくならないととらえる」が多くなっている。これは、差別の厳しい現実の表れととらえることもできる。また、他の保育所では、「教えない方が良いと感じた」「学校でわざわざ教えるから、それまで意識していなかった子も差別意識をもつ」などの記述も多かったことで、今後の人権保育・教育の課題が浮かび上がっている。

社会にあると思われる差別についても、「差別」を見たり、聞いたり、体験したりしたことが、意識されていないのではないかとと思われる数値となっている。

### ③ 「社会にあると思われる差別」について

また、社会にあると思われる差別についても

(表6)、全体では「障がい者差別」があると答えている保護者が75.9%と最も多く、続いて「学歴差別」、「部落差別」と答えた保護者が多いという結果であった。

保育所A・B・Cについて言えば、上位3項目が「障がい者差別」、「部落差別」、「学歴差別」という順番で、部落差別が学歴差別より高くなっている。

「部落差別がない」と回答した人は「差別」を見たり、聞いたり、体験したりしたことが全くないか、あるいは見たり、聞いたり、体験したことがあるにもかかわらず意識されていないのかは分からない。

ただ、保育所Aでは、「部落差別がある」と回答した人が約6割で、残り4割は、「部落差別がない」と回答している。この調査だけではわからないが、気になる数値である。差別を自分の問題としてとらえることができるように、乳幼児期からの人権保育の内容や方法につい

て、課題が大きいと思われる。

#### ④ 子育てに影響したことは？

今の自分や子育てに影響を与えているものとして、全体では「育ってきた家族との人間関係」が最も多く、ついで「親の生き方」となっており、家族環境が強く影響していることがうかがえる。保育所・幼稚園別の考察では、保育所Aの「いじめや差別」の点数が平均の倍以上になっていることが特徴的である。これが人権意識につながられるのかどうかは、大きな課題である。

#### ⑤ 部落の現実から学ぶことの重要性

この意味において、今後どのような保育・教育が必要なのかを追究する際に、差別の現実から学びつつ創造していくという原点が改めて重要な課題となっていることが指摘できよう。全体として、保育所A・Bと保育所C・幼稚園との二つのグループに分かれる傾向が見られた。

図7 差別の問題をどう感じたか

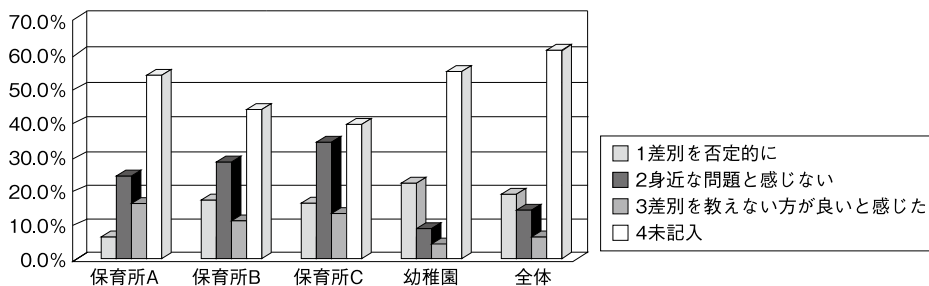


表6 社会にあると思う差別 (複数回答)

	ア 部落差別	イ 職業差別	ウ 学歴差別	エ 障害による差別	オ 国籍による差別	カ 性による差別	キ 貧富による差別	ク 地域による差別	ケ 社会的身分・家柄による差別
保育所A	61.8%	49.4%	57.3%	68.5%	51.7%	39.3%	29.2%	31.5%	28.1%
保育所B	72.0%	54.0%	66.0%	78.0%	58.0%	22.0%	18.0%	18.0%	16.0%
保育所C	73.0%	64.9%	73.0%	83.8%	67.6%	29.7%	18.9%	10.8%	21.6%
幼稚園	61.1%	49.4%	64.7%	76.4%	61.9%	37.3%	29.0%	20.2%	27.6%
全体	62.6%	50.6%	64.3%	75.9%	60.6%	36.0%	27.7%	21.0%	26.5%

## 6

### 今後の課題

—今回の調査をどう受け止めるべきか—

#### ① 部落の子育てや子どもの現状も多様になってきている

今回の調査から言える特徴は、一言で言えば、部落の子どもや親の子育ても多様になってきているということである。この点では、85年調査とも95年調査とも異なる傾向が示された。つまり、“部落の子ども”と一括りできる傾向ではなく、二極化している実態が明らかとなったといえる。

園での子どもの姿の側面から言うと、順調に育っている傾向が見られ、これは、1970年前後の保護者・保育者・行政など総ぐるみの中で取り組んできた成果が初めて確認されたと言える。この意味においては、今回の調査はこれまでの取り組みが一定評価されるべきことを示したということもできる。

しかし一方で、成果を確認できなかった層もいることを同時に確認しておく必要がある。すなわち、家庭生活の部分においても、園での遊びの部分においても課題を残しており、それは同和保育で課題として語られてきた実態とほとんど何も変わっていないという現実がある。この層の特定には、統計上の処理を含めて、いろいろな検討が必要であるが、今後、何らかの方策が保育関係者において検討される必要があろう。少なくとも、保育における部落問題が解消したとは言えない状況があることは、今回の調査の統計的分析からは言えよう。

以上のことを考えると、本稿冒頭において四つの課題（30頁）を提示したので、もう一度見ていただきたい。

#### ② 今後の課題について

上の四点の解決に向けて、これから検討すべ

き点を提案し、最後のまとめとしたい。

##### 1) 部落の子どもへの二極化について

部落の子どもの全体が、かつては一部を除き厳しい状況におかれていた。しかし、1970年前後からのおおよそ30年の取り組みによって、子育てが大きく前進してきた層がいる反面、そうでない層がいることをどのように考えるかという点が課題である。

結論的には、こうした課題をもつ家庭や子育てに焦点を当てた保育、ならびに保育行政が必要であると考えられる。ただし、どんな施策が必要であるかは今回の調査からは明確なことは言えない。しかし、基本として押さえておくべきこととして、厳しい状況の親や子どもがしっかりと自信を持ち、子育てが楽しいと思え、かつ子どものためにどうすればいいのかを自ら考え実践していく家庭にしていくための支援のありかたを明確にすることが重要であろう。

今回の調査に協力いただいた家庭は、保育所に子どもを通わせているので、家庭・地域と共に考える基盤があり、この条件を生かした子育て支援を検討することはそう難しいとは思えない。この意味では、1970年代の状況とは比較にならないほど有利な条件があると言える。

##### 2) 「順調に育っている」子どもへの対応について

今回の調査では、子どもの育ちの面では全体として伸びが見られるという結果がでたが、二極化の一方の極、いわゆる“伸びている”“安定している”層をどのように見るかという問題がある。一定成果があるので、それで良いのだと考えてしまいがちだが、そう単純に考えて良いのであろうか。

むしろ、今後注意を払う必要があるのではないかと考えられる。その理由として、今回の調査では、子どもが順調に育っている場合にも、その背景にある子育てには厳しいものがあると

いうこと、そのため、子どもの育ちが確実に安定したものとは言いがたい、ということが今回の受け止めだということである。

### 3) 部落の親たちの差別に対する意識から

今回の調査で特徴的であったことは、部落の親たちの差別に対する複雑な意識である。量的には必ずしも多くはないが、差別は宿命であると考えている親たちがいることも明らかとなった。また、部落問題を教えない方がよいという親も結構いる事実も見えてきた。一方、部落外の親たちの中には、差別はおかしいと把握している層もいることが示された。このような差別に対する意識を抜きにして、同和保育の今後を考えることはできないだろう。

部落の親たちのアイデンティティをどのように考えるかという議論があるが、このような事実を出発点にして同和教育・同和保育の内容が検討される必要がある。部落の親たちが誇りをもって自分の出自を言っても不利益にならない社会の実現を求めているとすれば、また、子どもたちが胸張って子どもの自らの出自を語ることでできる社会の実現を求めているとすれば、この課題は大きな問題である。

そこで、この点に関わって次のような課題を意識することが大事ではないかと考える。

#### ① 部落外の親たち・子どもたちの偏見に関わる取り組み

第一義的には、部落外の親や子どもに対しての偏見を生まない、偏見を変える啓発の課題である。本調査の調査委員会は、このために何をなすべきかを論じる立場にはないと考えているが、乳幼児期から偏見をなくす取り組みが行われ、すべての子どもたちがいわば「人権力」を持つというような積極的な方向性をもった取り組みが必要であろう。すなわち、単に偏見を洗い出してそれをなくしていくような取り組みが同和教育・保育である、というように思ってい

る人々も少なくないが、一人ひとりの生きる力と結合して、すなわち、子どもたち自身の豊かに生きる力の形成と結合して、差別をなくそうと行動する力をどのように形成するかを焦点とすべきであろう。

教科書無償の運動に見られるように、同和教育の取り組みは、本来そうして定着してきたのである。そうした取り組みに、部落外の親も参加していくような内容や方法をどのように考えるかが、重要な課題であると言える。

#### ② 部落の親たちのアイデンティティ形成

部落の親たちが明確に自己のアイデンティティをもつこと、まして、それを表明していくことは、そう単純ではないことは当然のことである。しかし、部落の親たちが、子どもたちに対して差別と対面しても人間として堂々と主張していくことを望んでいると考えるとすれば、すなわち、今回の調査で見られた「差別を宿命と考える」「教えない方がよい」との回答を、差別のない社会への願いの裏返しとして受け止めれば、子どもの未来を語るなかで宿命論を克服していく丁寧で持続的な力を保育・教育関係者が身につけていくことも重要な側面であると思われる。

#### ③ 自主的な親の取り組みの重要性

とはいっても、親自身が偏見をなくすためには、子どものために何をなすべきかの自主的な取り組みが重要であることは当然である。この点で、地域差があることに留意して、子どもが人間としての力を豊かに発展させるという方向性をもちつつ、お互いに援助しあうそうした発展的な取り組みが必要である。そのなかで、差別への意識への取り組みが行われるものと考えられる。

今日、国として提起されている親支援の課題は、同和保育が先進的に取り組んできたものである。にもかかわらず、今回の調査では、地域

差があるとはいえ、親たちが子育てを共に考えたり、保育所のいろいろな取り組みに参加したりする側面が弱いという意外な結果となった。この意味では、親が魅力的に感じ、かつ、必要性を感じられる課題が提起されていないのではないかと考えられる。今、全国的に丁寧な取り組みが開始されつつあるが、そうした取り組みが子どもの人権の視点から構築される必要があろう。

#### 4) 同和保育について

以上述べてきたことは、「特別措置法」によって生み出された同和保育の施策をそのまま行政施策として再現することを結論付けているのではない。そのような方向も一つとして考えられるが、そうなるかどうかは別の問題であり、それは関係者で議論すべきことである。

調査から言えることは、課題をもった子どもたちへの明確な取り組みが必要であるという点であり、そのための方法は多様に議論すべきであるということである。たとえば、本調査で明らかになった生活習慣に関わる実態は、一般的な形でも最近指摘されるようになり、子育て支援などの施策が検討され一部は実施されていると受け止めることもできる。この意味では、すべての子どもたちが豊かな未来を追求する権利をもつとの原則から言えば、何らかの方策が明確にされていくべきであろうと考える。

#### 5) 現実から学ぶことの必要性

—緊急の課題として

冒頭に述べたように、今回の調査が大阪全体の課題となるかは対象数等の関係で明確ではないが、部落の現実、つまり、子どもの実態や子育ての実態をしっかり把握する必要があるということは、今回の調査から確認できることだと考える。そこで今後に向けて次の点を課題としてあげたい。

①今回の調査において提起されている方向も参

考にしつつ、さらに、具体的な課題を検討していく必要がある。この意味においては、まずは、自治体・保育所・地域ごとに部落の子育てに関わる実態把握がなされていく必要がある。かねてから強調されてきた「差別の現実から学ぶ」ことを、保育者・行政の目で、子どもたちや親に関わって、改めて事実を確認する必要があると思われる。この中心の営みは、子ども・親と対面している保育の現場から提起されないといけないのではないかと。というのは、スローガンや概念的な把握だけではつかみきれない事実があることが今回の調査では特に提起されたと考えるからである。また、それでこそ、人権保育が一步前に進むと思われるからである。

②その際に、子どもの問題では、部落の子どもであろうがなかろうが、健やかに成長を遂げていく現実にあるのかどうかを、今回のような統計的手法を取り入れながら検討することが重要であることは言うまでもない。今回の調査項目は限定的であったためできなかったが、子どもの内的活動を念頭においた実態把握がされていく必要がある。とりわけ、子どもの言葉・コミュニケーション能力の成長にも視点をおいて検討する必要があると思われる。

③実態把握のやり方では、親自身が育っていくことを大切にす意味においても、「親と一緒に」「事実を確認する」という保育本来の方向にもっていくことが大事であろうと思われる。そのためにも特に、保育所現場で行われる調査・観察を大事にして、地域白書を検討してはどうか。また、実態把握は、乳幼児期だけに限定するのではなく、小学校低学年までの子どもの育ち、親の子育てを検討することを考えてはどうかと思われる。



#### 引用・参考文献

- 大阪同和保育連絡協議会編著『部落差別と子育て乳幼児実態調査から学ぶ』大阪同和保育連絡協議会、1990.7
- 大阪府・大阪市・堺市『保育実態調査中間報告書』同、1997.3
- 大阪保育子育て人権情報研究センター「子ども・家庭・園をつなぐ——同和保育プロジェクト子育てアンケートより——」同センター、2008.9
- 乳幼児実態調査実行委員会『被差別部落の乳幼児の「生活と遊びに関する実態調査」中間報告』大阪同和保育連絡協議会、1986.11